

史料館だより  
第6号  
1984・2・21

拡張完成記念号

編集 田辺真人  
発行 神戸・深江  
生活文化史料館

〒658 神戸市東灘区深江本町3-15-17  
電話 神戸(078) 45314980

生活文化史料館拡張再開館

神戸深江生活文化史料館長  
県立御影高等学校教諭

田辺 真人

旧深江村の村誌編集集中に収集された民具や史料の収蔵・展示のために、深江財産区(太田垣正雄会長)が昭和五六年二月二日に開設した「神戸深江会館生活文化史料室」は、わずか五〇平方メートルの施設であった。しかし、深江で六代続く医師深山健二家をはじめ市民から寄贈された当初千点の資料を展示していくうちに、郷土を愛し学ぼうという市民や、地域社会の歴史と生活文化の歩みを学ぼうという学校教育関係者から大きな反響があり、市役所や報道関係の方方も大きな声援を寄せられました。

深江住民はじめ県下から数千点の資料が提供される一方、この市民の歴史の市民の博物館を支えようと、有志で結成された友の会(小嶋悦郎会長)も歴史を身近に感じ学ぼうという企画を実現し、三百名の参加をみた魚屋道を歩く会のように大きな成果をあげました。そして、深江で五〇年も海の男を育ててきた神戸商船大学からの海事資料の貸出し展示の話もまとまりました。

昭和五八年、財産区は市の協力で施設の拡張充実

を決定し、五月着工・八月上棟・十月竣工。十月三〇日に、神戸商船大学松本吉春学長や仁木寛人東灘区長など一五〇名の人々が参加して拡張再開館を祝い、名称も「神戸深江生活文化史料館」と改めました。一階には通史、二階には昔の生活・民具・深山記念医事史料・神戸商船大学海事資料の五展示室があり、三階のミニホールではパネル展や講演会が開けます。ここでは開館記念に神戸市立森林植物園のご協力で「人のくらしと植物展」を開き、好評を博しました。

史料室時代の二年半で約三千名の見学者がありました。拡張再開館後は三カ月で約二千人が来館されました。文化の日に神戸史学会の大会があったほか、魚崎小学校・本庄小学校・福池小学校・東灘小学校などが学年単位で見学され、今後の学校教育の場との連携が一層期待されます。また、兵庫県博物館協会への加盟も認可されました。

ともかく新たな一歩を踏み出した史料館を、今後ともよろしく願います。



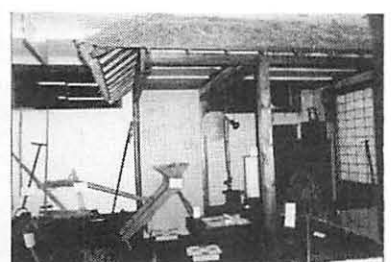
史料館外観

灘地方の一画にふさわしい、酒蔵風の白壁黒瓦の外観。鉄筋コンクリート造り3階建の史料館が、右下の大日霊女神社の緑の木立にはえている。史料館の右側は、深江会館。



拡張竣工式から

昭和58年10月30日によるこびの祝賀会が行われました。テープカットをする(右から)、深江財産区の太田垣正雄会長・深江連合自治会の岡田龍太郎会長・生活文化史料館の田辺真人館長。



展示室の内部

昔の生活展示室には市民から寄贈された農具・漁具があり、いろりを囲む部屋には、糸車や行灯・古いたんすなどがあります。広くなって、いろいろと展示の工夫ができるようになりました。

# 深江と商船大学海事資料館

神戸商船大学教授  
史料館理事 杉浦昭典

終戦の翌日、私は満十七歳の誕生日を迎えました。高等商船学校に在学中だった私は、海軍予備生徒として、上陸間近と伝えられる米軍を迎え撃つため、その前日までは陸戦訓練に明け暮れの毎日でした。それから既に三十八年経ちましたが、その頃のこととそんなに遠い昔だったとは思えません。今でも、上級生にしごかれていた夢を見ては目を覚まし、ああ夢で良かったと思うことが時折あります。

もしも私が十七歳の昔に戻って三十八年を逆に迎えたとしたら明治四十一年になります。その三年前には日露戦争があったのです。子供の頃、日露戦争などというものは遠い遠い昔のことのように思っていました。しかし、今になって考えてみますと、その頃の大人にとってはそんなに昔の出来事ではなかったのです。それでも、私にとって日露戦争はもう歴史の中にありました。現在、第二次世界大戦が歴史の中で占める位置と同様です。歴史とは古くて新しいもの、まさに私たち自身が歴史を作っているものであり、一日一日を大事にして行かなければならぬことを改めて考えさせられます。

神戸商船大学の歴史は大正九年創立の神戸高等商船学校から、さらに大正六年創設の私立川崎商船学校まで六十六年の昔にさかのぼります。川崎商船学校は、川崎造船所の社主川崎正蔵氏の遺志を継いだ

川崎芳太郎氏が私財を投じて設立したもので、やがて官立移管を企図しながら志半ばで倒れたため、川崎武之助氏によって神戸高等商船学校開校の道が開かれました。戦災で焼失した旧校舎の鬼瓦には、川崎重工などの社章に見られる川崎家の川を図案化したマークが刻まれていました。

校地の選定については、東は大阪の浜寺から西は明石に至るまで、大阪湾沿岸の浜辺を細かく実地踏査した上で、武庫郡本庄村深江と呼ばれていたこの土地に白羽の矢が立ったということです。東京高等商船学校がその所在地の地名から越中島と呼び慣らわされて来たように、神戸高等商船学校は深江の名で親しまれ、今日でも両商船大学は東の越中島と西の深江ということでの日本の商船教育を二分しています。

川崎商船学校は本庄村、神戸商船大学は本庄町、東灘区、神戸市、兵庫県など、それぞれ地元の方々の創設に対する熱意と応援によって実現しました。神戸商船大学の校史には、必ず川崎商船学校以来の経緯が詳しく述べられています。

商船大学と地元とのつながりが昔ほど密接でなくなってきたのではないかと考えることです。時あたかも深江文化史料館増築に際し、神戸商船大学海事資料展示室を設けて頂くことになりました。このことが深江と商船大学のきずなを確かめ合う契機に

なれば真に幸いです。

神戸商船大学は海技専門学院の施設を継承して昭和二十七年に新設されました。しかし、戦災をまぬがれた教材や戦後に入手した機器の中には日進月歩の技術教育に適しなくなったものが多く、そのままではやがてどこかへ散逸してしまうおそれがあったため、一カ所に集めて保存し、いずれは海事博物館を建設してその展示資料に使いたいという気運が興りました。その結果、先ず昭和三十三年五月から海事参考館を発足させました。

折よく建造されたばかりの実習船深江丸を使い、海事調査団を編成して瀬戸内海を巡り、各地で可能な限りの資料を収集することになりました。調査航海は毎年春休みと夏休みを利用して行い、その間には古書古物商からの購入や陸路による調査旅行でも史料が求められました。調査団を乗せた深江丸は海賊船だとまで言われることもありましたが、その成果は目覚ましく、和船関係では他に類のないユニークな史料が集まりました。

海事参考館は昭和三十六年に海事資料館と改称、昭和四十二年に現在の建物で完成、整備されました。専属職員が配置がありませんので、大学附属図書館で管理していますが、予め申し込んで頂ければ見学することが出来ます。文化史料館の商船大学コーナーには、海事資料館展示資料の中から特に深江と関係のある史料の他、一般海事資料も出品されることになろうかと思えます。商船大学をより身近に感じて頂けるように、そして大学側からも深江の商船大学であることを再認識できる場としてこの展示室が役立つことを願ってやみません。

## 広がる水田、さかんな開発

史料館調査員  
神戸新聞記者

児玉昌巳

深江村にまつわる原典史料は極めて限られている。大半が、先人が血のにじむ思いで筆写した二次史料があるだけだ。あるいは写し誤りがあるかも知れぬ。しかし今、私たちに残された「歴史時代の深江村」を探究するのは、この史料にしか頼れなくなった。

不十分なことは十分知ったうえで、残された史料から「歴史時代の深江村」を再現してみたい。ただ、順次史料編を刊行し、最終的には通史編を世に送る計画があるので、ここでは私の専門分野の近世史主に織豊時代から江戸時代に限って、その準備ノートの意味しかないことをあらかじめ御了承願いたい。

一回目は、土地台帳を取り上げる。深江村については、寛文四年(一六六四)の検地帳①、寛文七年(一六六七)②の新田検地帳が大部分である。①によれば、江戸前期、深江村は五百十七石余りの石高があった。当時の全国の村の石高平均は三、四百石と言われており、全国的にはやや大きい村と言え、中でも近畿地方は古代から生産力の高い地が多く、近畿地方では中程度の規模と言えらる。

その内訳は、大半が田地で四百四十九石九斗。割合にして全耕地(屋敷地も含む)の八七%を占める。これに対して畑地は九%、屋敷地四%。深江のような浜地にもかかわらず、当時に水利条件が整い、

水を多く必要とする田地が極めて多かったことが分かる。

ただその主流を占めるのは中田と下田(計四百十三石)で、最も生産力の高い上田はわずか十七石余りしかない。肥料や労働力を精いっぱいつぎ込んで見返りの少ない田地が多かったのである。当時の生活の苦しさは察して余りある。

さて、そのわずか三年後の②の史料で、計六十四石もの新田が新たに検地されていることが分かる。それは卯年(寛文三年)、辰年(同四年)、巳(同五年)、未(同七年)に開発された新田と思われる。この時代は全国的に見ても耕地が急拡大する時代で、統一政権の成立・村落の中での農民層の成長を背景に、開発行為が盛んに行われていた活気ある時代の様子がしのばれる。単近な例をあげれば、昭和三、四十年代の高度成長期に似た現象が当時の日本や深江村でも進行していたと言つてよからう。

次に、村の中の経済的な力関係に目を移そう。寛文四年には村内に、領主から一人前の百姓として認められた農民が百人いた。その特徴は、飛び抜けて大きな土地所有者がいないことである。最高が三町三反余りでせいぜい四十石止まり。江戸幕府は、農民が相続によって代を経るごとに耕地を細分化し、農業経営の基盤を悪化させることを極度に嫌った。

農業経営の安定が年貢の安定確保につながり、さらに幕府、大名の財政を安定させるからだ。このため一般の百姓が十石未満の耕地になる分割相続を禁じた(分地制限令)。この規準から見ると、深江村の場合、長男、次男に分割相続できる農民はわずか二、三人しかない。つまり大半の農民は、次男、三男には全く財産分けの不可能な農民だったわけだ。その一方、経営者自身が数坪の田畑しか持たない家もあり、農業だけでは生活がでない農民層も多かった。深江村はけっして小さな村ではなかったが人口密度が高かったのである。その後、幕末まで二十回の新田検地が行われている。その大半は、江戸前・中期の享保時代(八代将軍・吉宗のころ)に集まっているが、それだけしばしば耕地開発の努力がなされていたことを示す。ただ、ほとんどは五石未満の小規模な開発に過ぎない。言いかえると、江戸幕府開設後の六、七十年後の寛文期までに、開発の容易な土地は半ば耕し尽くされたのである。しかし生活に窮した農民は、水の便の悪い石ころの多い荒地を次から次へと開発し続ける努力を重ねたのであった。

幕末から明治にかけては、茂左衛門家、新左衛門家が土地集積を進めるが、他地域の豪農と比べれば、足元にも及ばない規模だった。

# 打出焼について

望月 浩

打出焼は、丹波焼・出石焼・明治初期からの琴浦焼(尼崎市)と並んで知られる地方の焼物である。

平安の頃にさかのぼって、在原業平時代の大宮人が、この地で焼き物を焼いたのが始まりだという。また、業平自身が元祖だという伝説もある。が、もちろん、それはそのまま史実とは認められない。

打出の土地は、古くから良質の粘土を産して、打出の粉土と呼ばれて、壁土の産地として知られた。土塀・瓦の原料にも利用され、西宮や神戸市の新家方面にもかなり運ばれた。

明治の中頃に芦屋の、斎藤幾多氏がその良質の粘土に着目して、今の楠町に建てた別荘、いわゆる齋藤御殿に陶工を招いて庭焼の窯を築いた。

俳人の阪口庄蔵氏(初代砂山)が、明治四十二年(一九〇九)に打出丘陵(芦屋市打出春日町七・旧打出村字古敷二十三)に窯を築いて、製陶を始め、大正三年(一九一四)一月には、資本金一百万円の合資会社打出焼陶器工場を設立した。以来、工夫と研究を重ね、花器や茶器・皿・小鉢などが焼かれて、広く京阪神の人々に愛されるようになった。

太平洋戦争前に、初代砂山氏がなくなり、阪口淳氏が二代目として窯元を継ぎ、「打出焼」の普及に努められた。

しかし、昭和三十年頃から岩園・翠ヶ丘付近が宅

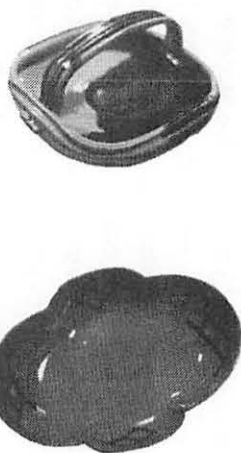
地化し、原料の粘土が不足するため、伊賀・信楽・京都などの土を搬入し、需要をみたした。

昭和四十年頃から製作は中止され、窯を閉じた。

その後、三代目の阪口孝氏も、陶芸の世界を志し、楠部弥次氏に師事し、陶芸教室のような形で打出焼を再開したが、かつてのような日用食器の製造というようなものではない。

## 二

次に、打出焼の製造工程を述べよう。まず粘土で型をとり、手口口、蹴口口を用いて形を整える。



打出の土は鉄分が多いので摂氏約八百度で素焼きし、(押型、手造りの方法によって素焼きすることもある。)下絵、施釉をして、登窯で摂氏千三百度に熱する。二昼夜ぶつ通しで焼くと、赤味を帯びた製品ができる。

登り窯というのは、階段式の窯で、手前に低く、たき口から松の薪を入れて焼くのである。窯の中の温度を均一に調整するために、ゼーゲルという温度計を入れておき、側面の穴からのぞくようになってくる。この本焼で一応仕上がるわけだが、仕上製品

までに二、三ヶ月はかかったという。

その作品は、赤味・黒味が特徴で、ドッシリとした感じで光沢もあり、冴えた音がして優雅な趣をたえていく。手の込んだものは、更に上絵を描き、電気炉に通じて仕上げていた。

## 三

神戸深江生活文化史料館には、角型小鉢・花卉型小皿・菓子鉢・抹茶茶碗が収蔵されている。

## 四

この打出焼に関して記した文献は次の通りである。  
天王寺勘太夫『打出史話』天王寺勘太夫 昭15。  
魚澄惣五郎『芦屋市史・本編』芦屋市教育委員会 昭31。

細川道草『芦屋郷土誌』芦屋史談会 昭38。

青木重雄『兵庫のやきもの』神戸つ子編集室 昭45。

青木重雄『兵庫のやきもの』神戸新聞出版センター 昭51。

田辺真人他『芦屋の生活文化史』芦屋市教育委員会 昭54。

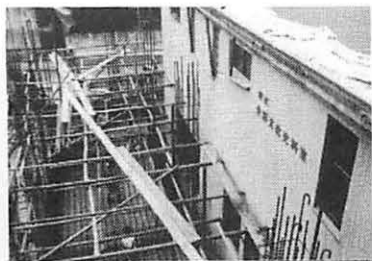
於須磨離宮 天覧に候  
御上光榮に浴したる

## 打出焼陶器

茶碗	吸物碗	五皿	向皿	小鉢
鉢	鉢	盃	盃	利口
抹茶器	煎茶器	盃	盃	猪口
花瓶	香爐	菓子器	菓子器	菓子器
花指瓶	水盃	香爐	香爐	香爐
蓋置	手洗	湯吞	湯吞	湯吞
火鉢	湯吞	湯吞	湯吞	湯吞
土瓶	湯吞	湯吞	湯吞	湯吞
其他	其他	其他	其他	其他

兵庫 丹波 出打 陶器 工場  
神戸 電中 出打 陶器 工場  
三三 番 三三 番 三三 番  
(電 話 芦 屋 三 三 番)

大正時代の打出焼のちらし



### 拡張工事中の生活文化史料館

神戸市都市整備公社の監督・設計、クニ工務店の施工で、増築工事が行われた。5月14日に地鎮祭が行われ、8月13日に上棟、お盆あけから外装内装にかかった。10月11日に消防検査、10月20日に竣工し、その後、アートディレクターの佐伯道子氏らのご協力で展示をすすめて、30日のオープンにこぎつけました。右は基礎工事完了後の鉄筋組み立て、中は上棟時の屋上部分。左は工事中の史料館外観。ようやく完成の日を迎えるに当たって、工事関係者・友の会・市役所の皆様のご協力に深謝します。また、近隣の市民の皆様や見学者の方々など、工事中いろいろとご迷惑をおかけしましたことをご詫言申し上げます。



### 竣工式祝賀会受付

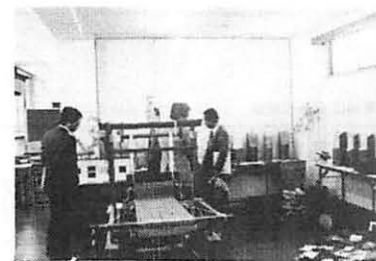
10月30日は快晴。深江会館2階ホールでの祝賀会のため、友の会幹事佐野末夫氏らが受け付けの準備。



### 初めての入館者の方々

開館後最初に入館される。(右から)杉浦昭典商船大学教授・磯辺信三大日神社奉賛会長。左はしは黒田隆商船大学教授。

# 拡張 前後



### 開館記念特別展

3階のクリオルームでは、神戸市立森林植物園の協力ですべて「人のくらしと植物展」を開き好評でした。



### 古い漁具の展示

旧深江漁業協同組合の皆さんの全面的協力ですべて収集されたイカ釣り具や煮干し製造具・大漁旗など、昔の生業コーナー。



### 展示室の整備

史料館員や友の会有志によって、竣工後オープンまでの間に大急ぎで展示室が整備され、10月30日を待った。

入会のおすすめ **神戸史学会** (代表 落合重信)

機関誌「歴史と神戸」(隔月刊)

会費・年額 2,000円(1~12月分前納)

〒653 神戸市長田区川西通3丁目8 太陽印刷内  
☎(078) 691-2085 振替口座 神戸4018

**神戸華僑歴史博物館** (館長 陳 徳仁)

9時~17時(年中無休)

大人 300円 学生 200円(10人以上団体割引有)

国鉄元町駅 西口から南へ5分の海岸通角

〒650 神戸市中央区海岸通3丁目東南角KCCビル2階  
☎(078) 331-1277







**史料館拡張の経緯**

史料館理事・岡田龍太郎氏（深江連合自治会長）から、史料室開設より拡張にいたるあらましの説明。



**来賓・商船大学長の祝辞**

松本吉春神戸商船大学学長から来賓を代表して、お祝いのことばをいただいた。



**拡張開館のあいさつ**

史料館理事長・太田垣正雄氏（深江財産区管理会長）から、参会の方々へのあいさつ。

1983年(昭和58年) 11月 4日 金曜日

享月 日 祭月 祝日 (夕刊)

- 友の会・新入会員(つづき)
- 新田 利隆 山川 実  
 新田富美子 山村 曜子  
 柏原 正民 村上 廣治  
 内海 清子 澤野 久  
 黒田 宏明 藤川 祐作  
 寺田智恵子 柏原 徹  
 辻 昭一 三川 幸  
 辻 邦夫 末石 直樹  
 梅木 忠和 坂本 順子  
 西本小太郎 廣出 弘毅  
 藤原 恭子 村田 文雄  
 藤原 久次 木下 道江
- 森口 健一  
 永井 武  
 飯塚 秀夫  
 小林 謙治  
 生田 義幸  
 福島 茂利  
 日比野正代  
 山内 英正  
 米正 行雄  
 大塚 康弘

# まちのミニ歴史博物館

## 住民、自力で大増築

神戸・東灘

神戸市東灘区深江地区の住民が、各家庭に備えられた古い民具などを集めて建てた全館民具で飾りつけた。全館民具で飾りつけた。全館民具で飾りつけた。全館民具で飾りつけた。全館民具で飾りつけた。

三階建てに増築された神戸市東灘区深江地区の歴史博物館。三階建てに増築された神戸市東灘区深江地区の歴史博物館。三階建てに増築された神戸市東灘区深江地区の歴史博物館。三階建てに増築された神戸市東灘区深江地区の歴史博物館。

江生活文化史料館(館長・田辺真人)は、五十六年(百深江財産区管理会長)太田垣正雄(同)が旧深江村誌づくりの史料集めに合わせ、誌(約八十万字)で開館した。当初の収蔵品は、地元で存在する明治のカルテ、明治時代の小学校の通信簿など約千冊。その後、百人全地区の歴史資料から約二千冊の被験者証明書を、昭和初期の家計簿などが寄せられ、いまは千冊に達している。

三階建てに増築された約三千平方メートルの歴史博物館。三階建てに増築された約三千平方メートルの歴史博物館。三階建てに増築された約三千平方メートルの歴史博物館。三階建てに増築された約三千平方メートルの歴史博物館。

本館は、深江地区の歴史資料を展示する。本館は、深江地区の歴史資料を展示する。本館は、深江地区の歴史資料を展示する。本館は、深江地区の歴史資料を展示する。

好評、発売中!

街かどにねむる伝説をたどり  
 神戸の歴史を歩く

### 神戸の伝説散歩

田辺真人 著

兵庫のふるさと散歩シリーズ 11

書店でお求めください

神戸新聞出版センター



神戸史学会の集会和見学（11月3日）

文化の日に神戸史学会は、恒例の神戸史学会賞受賞式を深江会館2階ホールで挙げる。その後、100人あまりの史学会員が史料館を見学。右は落合重信代表からの受賞式。左は本年度の受賞者石田善人岡山大学教授の記念講演「兵庫県の中世史」

感謝状贈呈

祝賀式ではクニ工務店やライオンズクラブに、友の会総会では小嶋悦郎友の会長に、財産区と史料館から感謝状贈呈。



小学生の団体見学

郷土学習の魚崎・本庄・福池・東灘各小学校の三年生全員が見学に来館。ボーイスカウトの分団なども、よく来られる。

開館後、団体見学の方々もふえる。婦人団体や小学校の団体見学もさかんで、本庄OB会人学級や明石の玉藻会、俳句のさわらび会などの団体が来館。



3年8組 小川 愛子

魚崎小学校からの感想文より

生活しりよう館の方へ

3年8組 西村 ころ

生活しりよう館には、古いものがたくさんおいてあったけど、じつくりと、見られなかったから、さんねえでした。はたおきまはどのようにして、つかうのだろうと、思いました。

むかしのお金やおさつも、たくさんありました。ぼくが、もっているおさつも、ありました。でも、ぼくももっているおさつは、ところどころやぶれています。むかしのせんぶう機は、黒でしたが、まだ、うごきますか。とてもよい勉強ができました。ありがとうございます。

深江のしりようセンターのみなさんへ

3年3組 小島 宣子

しりようセンターのみなさんありがとうございます。わたしは、社会が1ばんにがてだったけど、しりようセンターに見学に行ったら、おももしろくなりました。

わたしは、あまりむかしの物をみたことがなかったの、いいばんきょうになりました。また、こんどもよろしくおねがいます。どうもありがとうございます。



## 近隣の資料館をたずねて

友の会幹事 渡部 永子

昨年七月十日、史料館スタッフは朝、深江会館前を出発、一路播磨へ向かいました。秋に史料館が大きくなれば……ということで東播磨地方にある歴史博物館・資料館を視察に出かけました。

まず、姫路城を正面に県立歴史博物館へ。広々とした館内には「兵庫のあけぼの」から「近代まで」、また「姫路城のすべて」と題して姫路城だけでなく全国各地の城を紹介していました。小学生からおとなまで、直接銅鐸にさわったり鎧や十二単衣を試着できる体験学習コーナーやビデオライブラリーもあります。残念ながら、当日は修理中のためビデオは利用できませんでした。ただ館内が広いのに、順路指示があまりありませんので少し迷ってしまいました。

姫路から播但線に沿って、田園風景をながめながら、香寺民俗資料館へと向かいました。姫路の豪商の邸宅を移築したというこの資料館では、門を入った脇にあの懐かしい赤いポストが立ち、玄関口からずらりと資料が並んでいます。お茶碗から衣類まで、裏手には農具といったふうに生活用具がぎっしりです。整理もまだまだ途中のようで、出入口付近にはたくさん資料が積まれていました。これだけのものを整理するのは大変だと思いつつも三年前の深江の資料整理を懐しく思い出しました。

香寺民俗資料館からほんの少いで井上郷土玩具館があります。白壁土蔵造りの建物は井上館長の大き

な手作りです。この時は西ドイツのおもちゃが展示されていました。一つの展示室には実際に玩具で遊べるコーナーがあります。ここではおとなも童心にかえってこまやお手玉に夢中になります。遊びつかれた後は、展示館の裏側に、庭をはさんで立つランプの家で休憩。ここで囲炉裏を囲んで、いろんな人たちと話ができたならなアなんて思いました。

ひといきいれたところで、今度は、福崎町辻川へ。日本民俗学の創始者柳田国男の生家を訪ね、隣接する記念館へ入ります。ここには先生の遺品、著書などの他、その兄弟（松岡五兄弟）の遺品も収められています。玄関ロビーにビデオが置かれたり、テープ解説が流れていたりして全体的にゆつたりとした気分で見学できました。

最後に、加古川流域滝野歴史民俗資料館へ。加古川流域の生業、舟運の歴史を中心に鮎漁方法まで説明していただきました。ここには、殺虫のための燻蒸室が整っていて、羨ましく思いました。展示の仕方も、高瀬舟の模型や、座敷のような台など展示の工夫がとても参考になりました。

五つの館をかけ足でまわって、いろいろなタイプにおどろきました。大きくなればなるほど難しくなるのかも知れませんが、何らかの方法で館の人たちと見学者が一体になれる部分、じかにさわれることのできるコーナーができれば最高ではないかと思えます。



加古川流域滝野歴史民俗資料館  
近代的な建築と燻蒸室など立派な施設と工夫された展示が参考になりました



香寺民俗資料館  
雑多な収蔵品に囲まれて、お座敷で島津館長の苦勞ばなしを聞きました



井上郷土玩具館  
整然と整理された体系的な展示。井上館長ご夫妻の心あたたまる歓迎に、館員と見学者の交流の必要性を痛感しました

# 聞き書き調査から

史料室調査員 伊東玲子

深江史誌編纂のための聞き書き調査を始めて、はや半年がたった。多くの方々の御協力で、今年度末には民俗調査の概報を刊行する予定である。

深江の信仰行事として、一年のうちで最も規模の大きかったものに、森稲荷神社の卯之葉祭りがある。五月二十日のこの祭りには、森・青木と共に深江でも、若仲とよばれる青年達が棒鼻とよばれる頭を中心、神輿をかき地車を引いて村中を練り歩いたのである。神輿は三つの村が毎年交代で、森・深江・青木の順にかいていたが、深江の番の年には、神輿を海へ放り込もうとする若仲を止めるのが、世話人の役目であった。「神輿を海へ放り込んだ年は大漁だ」と言われて、若仲は競ってやろうとした。

又、神輿をかく時の神輿唄が作られ、八人の音頭取りによって最初は全員で、道中は二人一組になって音頭が取られた。音頭は「祝いめでたの若松様よ、枝も栄えて葉も茂る」であるが、その後の神輿唄は時勢に合わせて毎年作り変えられた。音頭取りは神輿行列の先頭に立って唄うので、祭の前には生玉子を飲み、当日その道中は氷砂糖をとかした湯を飲んで、美声を聞かせたという。

祭りには、他村の親類や嫁いでいった女性達もよばれ、村人と共に赤飯を炊いて祝った。

調査をしていて、このように生き生きとしたお話を聞かせていただくことは、我々調査員にとりて嬉しい限りである。今後とも御協力を願いたい。

友の会・新入会員 (敬称略)

- |        |       |
|--------|-------|
| 藤田 望   | 納多 和夫 |
| 堤 節子   | 原野 鈴子 |
| 井崎 智子  | 井崎 桜子 |
| 小田原清弘  | 田端 信行 |
| 山田 惠美  | 加古 道雄 |
| 橋 弥寿子  | 守谷富久枝 |
| 植戸 保信  | 藤崎 静香 |
| 村田惠美子  | 長尾比呂志 |
| 福井 健一  | 田辺 盈子 |
| 梶原美佐枝  | 新保 国子 |
| 岡部 博   | 鬼丸 貞彦 |
| 田中 穂積  | 永井 一郎 |
| 長谷川富美子 | 角野 幹子 |
| 高島 正子  | 小寺 淳一 |
| 小寺 悦子  | 鎌田 澄子 |
| 中川 昭子  | 堀 博   |
| 寺坂 光夫  | 大友 染子 |
| 内海志美子  | 松尾八重子 |
| 北島もと子  | 佃 元治  |
| 前中りつ江  | 上村喜三郎 |
| 成瀬ふさ子  | 山根万里子 |
| 浜口 充子  | 内海ミサヲ |
| 山本 勇   | 石口のぶ子 |
| 鎌田喜代栄  | 永田 朝子 |
| 裏川ときえ  | 安井 俊彦 |
| 阿部 義雄  | 志方 貞子 |
| 西尾 雅子  | 京本 正子 |
| 瓦林 平一  | 久保田礼子 |
| 笠原マサ子  | 久保田礼子 |
| 高谷加代子  | 辻 和夫  |
| 手島 一三  | 多田 修  |
| 逸見 理絵  | 細野 隆子 |
| 樋道 靖子  | 児玉 昌巳 |
| 谷川 廣明  | 宮内 正博 |
| 桑原 治子  | 山添 令子 |
| 佐伯 道子  | 山本 正治 |
| 山田 チヨ  | 山名 則男 |
| 川野 勝一  | 石田 治  |

新 戸 中 昭 和 58 年 (1983 年) 10 月 3 日

# 市民の博物館 国際提携

神戸深江生活史料館 ◆ 香港歴史博物館

市民の手で運営されている町の歴史・民俗博物館「神戸深江生活史料館」(神戸市東灘区深江本町三丁目、館長・田辺真人、創立御影高校教諭)が香港歴史博物館(香港、中国と日本の農具の比較研究を進めることになった。中国への「復帰」を志す「我々の香港」が、政治の協を越えた極めてユニークな民間交流。これまでの農具文化の比較研究は、字に重点が置かれてきただけに、農具に焦点を当てた研究は注目を浴びてきた。

史料館は五十六年、深江財一(い)の。史資料館(未田)正統会。香港歴史博物館との提携でも都市化に伴って古い農具が次々と姿を消しつつあり、林副館長の努力で数千点もの



深江生活史料館と提携、農具の共同研究をする香港歴史博物館

## 日中農具の交流を研究

農具が収集されたという。田辺館長と研究、関心も一致し共同研究の語がトントン拍子に響いて、提携がまもなく



田辺真人館長



林潔蘭副館長

農具の研究は、国が民族学博物館などで行われているが、イネの研究は比べられておらず、当面は、田辺館長が五年前に行った農具の調査報告書など文庫の交換を行うほか、現地調査にも出かける。田辺館長は「市民が手作りして学術交流を深めるのは、ミナト神戸にふさわしい」と話している。

# 史料館 友の会活動

県立舞子高校教諭  
史料館友の会会長

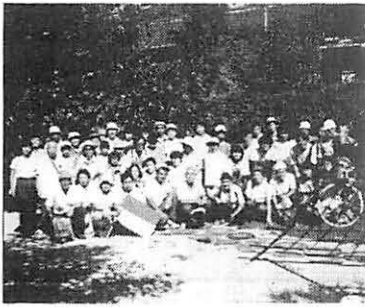
小嶋悦廊

待ちに待った史料館増築もやっと竣工式を迎えることができ、文字どおり生活文化史料館として開館の運びとなりました。

この大増築を機会に史料館後援団体としての友の会の活動内容をふり返り、会員の方々の一層の後支援と御協力を賜りたいと存じます。

友の会のあゆみについては別記「友の会の主な行事」を参照して下さい。発足以来二年半で第十五回目の例会を持つことができました。回を経るごとに参加者も増え、会員数も増加の一途をたどってまいりました。一月末現在で会員数は二九五名に達しております。

例会のあいまには「友の会通信」の印刷・発行や、例会の下見、バスや船の予約・交渉、次回例会計画打ち合せ、企画の検討、更に今回の会員名簿づくり等、会員に親しまれる「友の会」を願いつつ、幹事



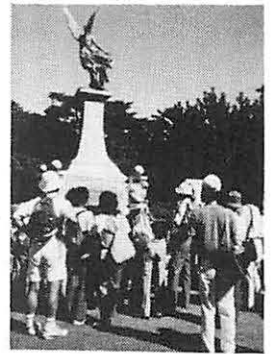
森林植物園にて  
六甲の植物から生活の歴史を学ぶ会。大脇園長、三宅さん、福永さん、お世話になりました。(58.8.28)

回数	年/月/日	行 事 名
	56 / 2 / 21 (土)	友の会発足 神戸深江会館生活文化史料室オープンの日 この時会員50名
1	4 / 12 (日)	灘の酒蔵を歩こう 半日ツアー (30名参加)
2	8 / 15 (土)	南蛮美術と摩耶山からの夜景を楽しもう 一泊見学会
3	8 / 16 (日)	芦屋ルナ・ホール郷土芸能の夕べ
4	10 / 17 (土)	ざんざか踊りなど鑑賞
4	12 / 6 (日)	神戸の史跡を2階建てバスで 須磨一の谷・考古館・居留地・北野町・ポートアイランド見学 (60名参加)
5	57 / 2 / 21 (日)	1周年記念総会 (150名参加) この時会員120名
6	5 / 9 (日)	須磨の歴史散歩と須磨のカメラアングル展見学 (30名参加)
7	7 / 25 (日)	なつかしい野外映画の夕べ (180名参加)
8	8 / 29 (日)	夏、海と夜景と神戸の歴史 セーリングツアー (210名参加)
9	10 / 10 (日)	魚をかついで魚屋道を歩こう 六甲越え登山 (300名参加)
10	11 / 13 (土)	芦屋ルナ・ホール郷土芸能の夕べ 須磨一絃琴など鑑賞
11	58 / 2 / 20 (日)	2周年記念総会 「魚屋道を歩く会」ビデオ上映と「新酒をくみかわしながら灘の酒を語ろう」(75名参加) この時会員230名
12	5 / 29 (日)	北神戸 山田・淡河の歴史と文化をたずねて バスツアー (85名参加)
13	8 / 28 (日)	六甲の植物から生活の歴史を学ぶ見学会 神戸市立森林植物園後援 (50名参加) この時会員数 260名
14	10 / 30 (日)	史料館増築記念祝賀会 (90名参加)
15	11 / 12 (土)	芦屋ルナ・ホール郷土芸能の夕べ 淡路人形浄瑠璃鑑賞

一同多忙な月日を過ごしてまいりました。そして、地元幹事の方には「友の会通信」発行のたびに、通信費節約のため会員宅に足を運んで頂き、種々の資料、刊行物の配布や会費徴集なども行って頂いております。改めて御礼申し上げます。

さて、会員の方には「東灘歴史散歩」「市民のグラフこうべー住吉川」「神戸の歴史ノート」「市民のグラフィックこうべーの池」「ひがしなだ文化レクリエーションマップ」等の配本のほか「友の会通信」(創刊号〜第九号)「史料館だより」(創

刊号〜第六号、同別冊)等をお届けしてまいりました。年会費一、〇〇〇円分を十分還元できる友の会でありたいと念願しています。そのためにも会員の方にはできるだけ友の会例会に参加したり、増築された史料館を訪れて頂きたいと思っております。今後とも物心両面にわたり、暖かい御支援をお願い致します。



外国人墓地にて  
第13回例会。第1次世界大戦戦没者慰霊碑の見学。

# 資料寄贈者ご芳名

拡張開館に際して、改めてご芳名を記し、謝意を表します。

深山健二・生活用具、史料等千余点/伊吹順隆・書籍/清水久雄・古銭、額/志井正夫・書籍/永井博彦・文書、写真/永井静江・消防団資料/神戸市教育委員会文化課・書籍/黒田博・時計/中川文雄・書籍/小西秋二・生活用具/三浦文子・玩具等/結城正佳・書籍/岩本正義・陶器/金岡章文・地図/志井保治・写真、戦時資料/鎌田武・大漁旗、盃/林芳男・書籍/深江青年団・青年団資料/久保川章雄・戦時資料/落合重信・書籍、版画/松本ヤス・教育資料、生活用具/森信夫・農具/佐久間一・農具/伴ぎせ・生活用具/田辺真人・書籍、地図、生活用具/太田垣正雄・火縄銃、生活用具、農具、機/深江消防団・半鐘、消防資料/神戸商船大学・教育資料/神戸市立本庄小学校・教育資料/深江漁業協同組合・漁業資料/梶正雄・戦時資料、火鉢/志井礼子・葉書/寺田徳雄・古写真/岡田直広・古写真/芦原常夫・漁業資料/中山菊治・漁業資料/大川常夫・つるべ/宇都宮宇作・ラジオ/藤田望・古銭/気賀峰子・古銭/吉川徹・竿秤、軸/永田健・古文書、酒造史料/納多和夫・記章類/上田儀重郎・生活用具/村上政輝・文献/太田垣勉・織機、農具、生活用具/深江大日神社奉賛会・写真/新田利隆・天秤棒等/福井健一・古銭/梶井一正・旧青木村地図/篠原孝裕・古銭、古文書/中村まさえ・名簿、生活用具/永井一郎・古銭/小薮純一・古銭/望月浩・書籍、土器/児玉昌巳・書籍類/竹田賢太郎・鋤/柴崎数馬・画報、フィルム/角本実・書籍/宮内房吉・漁業資料/立住隆典・玩具/坪内光重・磁器

(以上拡張前)  
増築拡張後の資料寄贈

飯田信一・消防関係(旗など)/志井礼子・柳行李古銭/井浪昭幸・書籍/野田正蔵・罹災者証明/前中隆一・メダル/大川弘・メダル/吉井定雄・バッヂ/池田英美・バッヂ/杉浦昭典・商船大写真/片田はつ・農具・提灯/永井博彦・写真・新聞/寺田音松・漁具等/竹田一雄・山樵用具・提灯箱/長谷弥太郎・漁具等/志井保治・漁具等/山本清次郎・大漁旗/旗/志井正夫・古銭・藩札・絵図/納多春雄・記念タオル/渡部宗一・記念タオル/鎌田武・写真等/山川実・船室等・自在鉤など/今倉友吉・じよれん/西田春野・法螺/磯辺信三・写真/新田利隆・写真/黒田梅吉・写真/天王寺谷輝男・写真・数珠/山口郁三・煮干しわし製造道具等/田辺真人・書籍/前田邦夫・土質標本/太田垣勉・機・農具等/梶正雄・証明書・公報等/本屋敷勝也・銀貨・銃の火薬・弾入れ・漁船(模型)等/芦原常夫・地引き網・じよれん(模型)/岩井高夫・打瀬網(模型)/花谷松夫・打瀬船の帆(模型)/太田垣正雄・酒ラベル・カメラ/岡田龍太郎・掛時計・深江字限図等/村上廣治日の丸寄せ書・支那全土地図/城くに・銀貨/中堂モト・源氏物語絵巻/納多和夫・賞状/大亦八郎・卒業アルバム/原知々夫・書籍・玩具等/足立宏行むしろあみ・もっこ等/柏原正民・マント・記章/村上辰夫・記念銀貨/望月浩・書籍(願不同・敬称略)ご協力に感謝致します。地域文化の振興のために末永く史料館に収蔵し、市民への展示に努めます。

## 編者から

開館に際して、甲南ライオンズクラブ・神戸湊川ライオンズクラブ・神戸市教育委員会・東灘区役所、その他多くの有志の方々から備品などのご寄贈を頂きましたこと、心から感謝申し上げます。拡張再開館から四カ月、二月末までに約三千人の入館者を迎えることができました。主な団体の見学者をあげてみましょう。

昭和五十八年十月三〇日拡張記念祝賀会および友の会総会一七五名  
十一月三日神戸史学会大会など一二二名/十一月九日日本庄小学校六年三組四二名/十一月二〇日ポリースカウト神戸六八四二六名  
および明石玉藻会五五名/二月三日中野保育所ほか六一名/二月一日日本庄OB婦人学級ほか五八名/二月一六日さらび会三一名/二月一七日魚崎小学校第三学年三三〇名。  
昭和五十九年一月二日ポリースカウト神戸二五五五五名/一月二六日日本庄小学校第三学年二二五名/二月二日福池小学校第三学年一五八名/二月四日東灘小学校第三学年一八八名/二月一八日頃本山南小学校第三学年(予定)です。  
二月二日には深江出身の三角やす様から、史料室の充実のため百万円の寄附申し出がありました。ありがとうございました。

## 協力団体

神戸市教育委員会 東灘区役所  
芦屋市教育委員会 神戸史学会  
国立神戸商船大学 武陽史学会  
神戸市立森林植物園 本庄五校園  
明石市立天文科学館 サンテレビ  
神戸華僑歴史博物館 大丸百貨店  
民家博物館四国村 神戸共同印刷  
井上郷土玩具館 御影高校地歴部  
深江青少年協議会  
深江ショッピングセンター

## 史料館員・役員

岡田龍太郎 太田垣正雄  
志井 正夫 小嶋 悦郎  
杉浦 昭典 志井 保治  
田辺 真人 滝本 鍊三  
松尾 福夫 永井 一郎  
石田 初美 深山 健二  
北島もと子 尾崎 京子  
竹之内淳哉 永井 真治  
結城 正佳 三浦 文子  
調査員 渡部 永子  
伊東 玲子  
児玉 昌巳

## 友の会幹事

長岡 暁子 望月 浩  
志井 保治 小嶋 悦郎  
門前 喜康 寺岡 一夫  
大川 弘 植本 敏紀  
佐原 浩平 佐野 未雄  
多田 康治 清水 久雄  
納多 春雄 田辺ゆかり  
門前 寛子